

R-18
FOR ADULT ONLY

ファンタジー
♡

ブルカ乳だらけの

CIRCLE HIMUGANEYA

- ミルクを吸いまくる勇者の話 -

ここは
剣と魔法の世界。

神々の血を引く
勇者の手によって
魔王が封印されたが、
残党として僅かに残った
魔族たちは依然として
人間の平和をおびやかしていた…。

世の中をカンタンに
平和は来ない!!

その魔族たちを
懲らしめるべく

勇者は「常人ならざる力」を
振るい続け、世界中を奔走し、
数多くの国々で活躍していた。

そして勇者の發揮する
「常人ならざる力」…
その力の最大の源は…

母なる生命の湧水…
すなわち母乳である。

この世界の女性が
出す全ての母乳は、
勇者にとってみれば
単なるミルクではない。

体力・攻撃力・防御力・魔力…
ありとあらゆる力を強化する
「最強の飲み薬」なのである!!

そして今日もまた
勇者は母乳を吸いまくる。

西の王国の森を巣食う
「魔女」を懲らしめるために…

西の王国中部
リヴェルニア地方
「モル口村」

「さて今日はどんな
女の人のおっぱいを
しゃぶろうかなあ」
期待と興奮で胸を
おどらせながら
村を探索していると、
綺麗な女性に
声をかけられた。

長い旅路の末にたどりついた村で
このデカ長乳が見られるとは…
疲れが一気に吹き飛んだ。

後ろから見てもこのデカさ。

ハミ乳すっぴん…

…その胸はでか乳だった。

あなたが勇者様ですね
村民一同お待ちしました
私はこの村の案内人です
「魔女の森」に繋がる
街道までご案内します♥

お尻もデツカい…。
案内される男みんな
発情するだろこんなの。

ではさっそく
「エネルギー補給」と行きますか…。

た

ぶん

案内人さん良い匂い...!
そして何より...
おっぱいやわらかすぎ!

ああっ♡
いけません
勇者様っ♡

お外では
人目に
つきまです

お乳の補給
でしたら
屋内で!♡

勇者である俺の手は
特別な力が宿っている
通称「神の手」!!
その手でおっぱいに
触れてやると、
どんな女性でも
母乳を生成するのだ。
我ながらなんと便利な手。

もみゅ♡

あー♡
出たぞ♡
母乳

おっぱい

じゅあ♡

いっ♡
いっ♡
いっ♡

あああつっ！
はあああつっ！
ダメ！
声出ちやいますっ！

この神の手には
母乳を搾り出すだけでなく
乳首の感度を高める力もある。

乳首を弄れば弄るほど相手は
次第に絶頂へと近づいていく。

ホ
シ
ケ
ル
ル
ッ
ッ

ああつ
んんっ
ちくびっ
ちくびい

じゆるじゆる吸いながら
ちくび舐めるのらめっ

おっぱいが
変になっひやいますっ！

♡♡♡

♡♡♡
♡♡♡

はあ

あ

はあ

はあ



はああつ…♡
ああつ…♡ はあ…♡
んふうあ…♡♡♡

勇者様…♡

もう行って
しまうのですか？♡

またげひ…♡
この村に
お越し下さい♡♡

いつでも
あなた様が来るのを
お待ちしております…♡

乳首だけで淫れイキみだした案内人さんの
官能的な表情は、授乳行為おっぱいマシーンの余韻アトと言えよう。

その姿を十分に堪能した俺は
この村を後にし、街道へと足を運んだ。

いざ魔王の森へ！



村を出て丸一日、ようやく
「魔女の森」に到着した。

昔はここも美しい森だったが、
魔女が住み始めてからは
触手を生やした無数の魔物
たちの住処と化してしまった。
辺りを探索していると、森の
奥から魔女が姿を現した。
単眼の魔物を引き連れている。

あなたが勇者ですね？
ちよと良かったです！
魔王様のカタキ討ちであなたを
倒そうと思っていたところでしたので、
探しに行く手間がなくなりました！

私は触手使いの魔女です！
魔力で手なずけたこの子たちを操り、
あなたを巻き付けて、絡み付けます！
覚悟してくださいね！

「巻き付く」と絡み付くは
同じでは？」と思わずツツコミを
入れると露骨に「ムムツツ」とした。
「うーん、なんか思ってたよりも
弱そうだし、すぐに倒せそうだな。」

シロー...

たがーん

まあもつとも今の俺にはほとんど闘う必要がないのだが…。
というのも、昨日したま案内さんの母乳を吸いまくっただけでなく、この森にたどり着く途中でも女旅人や女僧侶など大量の母乳を吸って吸って吸いまくったからだ。
つまり今の俺には限界突破するほどに強烈な「バフ」がかかっており、相手の魔力を弱体化する技も簡単に出せるってわけだ。
魔女の魔力が弱まれば、当然魔力で操っていた魔物たちは魔女の言うことを聞かなくなる。
魔女の傍にいた単眼の魔物は最初こそ俺に向かって触手を伸ばそうとしていたが、急に進路を変え、魔女の身体に巻付いた。

なっ…なっ!! ヨラッ!!
何してるんですか、離しなさい!!
言うこと聞きなさい!!
ちよっ…何で…魔力が弱まって…!?

!?
きやあつ!!
何するんですか!?

やめなさいってば!!

キョウ

ガッチリ

モ
コ

魔物の触手は、魔女の胸元の布を容赦なく下方に引っ張った。

すると、魔女の長くて大きい両方のおっぱいが勢いよく上下左右に暴れ出た。乳房の形もさることながら乳首・乳輪もなかなかの大きさと実に俺好みだ。

魔女は元からその魔物に好かれているのか、魔物に好き放題いたずらをされる。
(男の子が好きな女の子にいたずらをする心理と同じ感じだろうか…)

はっ



るん

単眼の魔物は魔女に夢中で、
敵であるはずの俺には見向きもしない。

なんだかこのまま面白いことになりそうなので、
例のごとく神の手で乳首の感度を高めておいた。

ちよつ…!!
何するんですか!?
痴漢ですよつ!!

なにこれ…?
なんかだんだん…
おっぱいに変な感じに…っ

おっぱい…!!

滴るミルクの香りを嗅いだのか、程なくして
先端が口のようになっている触手の群れが
魔女のおっぱい目掛けて這いよってきた。

ばっ…ばか!! やめなさいっ!!
私のおっぱいは
ご飯じゃありません!!
えっ、ちよつ…ほんとにやめt…

ムア…

ピョッ

ジワァ…♡

ピョッ

ムア…

ムア…

魔物も所詮はただのケダモノ。
操作魔法が一切使えない魔女の声など
届くはずもなく、触手は本能のままに
ひたすら魔女の母乳をむさぼりはじめた。

魔物たちの様子を見るに、
かなり空腹なのだろう
その勢いには全く
遠慮が感じられない。

人間顔負けの
すさまじい吸引力で
母乳を飲みこんでいく。





最初こそ魔物たちに抵抗しようと足掻いていた魔女だったが、5分もすればその力を失っていき、今や触手たちの好き放題となっている。

まあ俺が神の手で乳首の感度を高めておいたから無理もない。いくら魔女でも魔力がなげりや果てしない乳首イキの快感に勝てはしない。

まさか自分の手下だったはずの魔物の群れに自分が好き放題されることになるとは夢にも思わなかっただろう。



30分くらい経ったころ、大きな口を持つ魔物が現れ、激しい音を立てながら両乳首を一気に吸い伸ばした。魔女はこれまでで一番アカい声を出してイキ狂った。

さて、そろそろ乳首も仕上がってきたころだし、俺も参加させてもらおう。

1時間が経った頃、魔女はようやく母乳吸いの絶頂ループから解放された。母乳を吸いまくって満足した魔物の群れはそれぞれの巣に帰っていく。(最初に絡み付いた「単眼の魔物」はまだ魔女に絡み付いたままだが...)それからしばらくは快楽の余韻で全く言葉を発せられずにいたが、ようやく口を開いた彼女は...

ゆういまえんつ...
ついあつらといわ
かくおひれえくらはい...!!

とか訳のわからない言葉を話した。
おそらく「許しません」的な脅しだろう。
俺は魔女に近づいて「なかなか美味しいミルクだったから、次会う時はまた楽しませてもらうぞ」と言葉をかけると、「ぐぬぬ...」と、わかりやすいくらい悔し気な表情を浮かべた。

いや...そもそもそんなならしない
快楽堕ち敗北おっぱい晒したまま
すごまれても何も怖くないって...



まあ俺も悪魔ではない。
美味しい母乳を腹いっぱい
飲ませてくれたお礼に、
今絡み付いている魔物
くらいは引き離してやるか。



「そういえば君にかけた
魔力弱体化の効果は切れる
のは三日後だろうから、魔物を
支配できない内は森から離れて
おいた方がいいかもな」
俺は魔女にそれとなく
そのことを告げると、
途端にバタバタと暴れ始め、
絡み付いていた触手を、
必死に引き離そうとした。

王国中央部
王都・宮殿前広場

魔女の森を抜けた翌朝、
王国の都に到着した。

臣民たちに歓迎されながら、
俺は宮殿前の広場を闊歩する。

すると宮殿の方から家来が
現れ、俺の前でひざまずいた。

「国王様の命により、勇者様を
宮殿内に案内するようにと！」

言われたままに案内され
宮殿の中に入ると、出迎えて
くれたのは国王の娘……
なんとも可愛らしく美しい
でか乳の姫君だった。

勇者様♡
あなたの
数々の凱旋を
心から称えます♡

むぎゅ♡

姫君はそう言うとおもむろに長〜い谷間の美巨乳をギューツと寄せた。

なっがあゝ

ん……？
これはもしや……？
もしかして……？
もしかしなくとも
『そういつこと』
なのだろうか……？

いやしかし、相手は王族生まれのお姫様……。勇者の俺であっても手を出そうものなら『無礼どころでは済まず、最悪の場合捕らえられ、死……』

たゆんっ♡

しかしその予想は
良い意味で裏切られた。

日々のご奮闘
非常にお疲れでしょう…
私でよろしければ…
今日いっぱいあなた様の
癒しとなりましょう…♡♡

そう言うと姫君は
頬を赤らめ、庶民なら
絶対お目にかかれない
薄桃色の乳頭を
あらわにした…。

これ以上その恥ずかしいお姿を見続けていると
頭がおかしくなりそうだったので、
とりあえずおっぱいを全部無防備にしておいた。

姫君のおっぱいはぶるんぶるんと上下左右に暴れ出た。
そのおっぱいの暴れ具合には上品さの欠片もない。

ぶるん

俺は吸い寄せられるような気分で
姫君のベッドルームに連れられた。
ベッドシーツをはじめ部屋の隅々まで
女の子特有の良い匂いで満たされている。

さあ勇者様♥

私のおっぱい、思う存分
ご堪能なさってください♥♥

俺は思わず息を飲んだ。
庶民なら指一本触れることすら許されないあの姫君が、今まさに
ベッドの上で美しい乳房を寄せて、俺を誘惑しているのである。
俺は理性を忘れた獣となり、姫君のおっぱい目掛けて飛びかかった。



ああっ♥あつ♥
あああああつ♥
はああああつ♥♥

勇者様♥もつと♥
もつとたくさん
おっぱいしゃぶって…♥
しゃぶってくらはいっ♥
きもちいい♥
おっぱいいク♥♥
おっぱいだけで…
バカみたいに
イツちやいます♥♥

ちぎる

イキます

バカに

姫君は更なる快感を求め、
自らのおっぱいを俺の口元に
ムギユルと押し当てる。
その期待に応えるように
俺は下品な音を鳴らしながら
姫君の母乳をむさぼった。

そして調子を良くした俺は
一番強い吸引力を振り絞って
両乳首を吸い上げてやった。
すると姫君は、
おしとやかさの欠片も
なく、ドデカい声を
上げて果てまくった。



あんなド変態すぎるお姿を
晒され続けたせいでちんちんが
ピンピンに勃起しちまった。

おっぱいちゅっちゅ
しながら気持ちよく
なりましようね♡

仕方ないので、
その華奢な手で
抜き抜きシコシコして
もらうことにした。

小さな手だが、
手コキの勢いは
なかなか
すさまじい
ものがあつた。

勇者様のおちんちん
いっぱいおつき
しちやつてますね♡

そんなに
おっぱい
しゅきしゅき
なんです
かあ？♡

勇者様の
おちんちん♡

おちんちん♡

勇者様の
おちんちん♡

おっぱいミルクちゅーちゅー
しながらおちんちんチコチコ
してもらうなんて
ダメダメ勇者様ですね♡

お下品に
ざーめん漏らして
いっぱい気持ちよく
なりましようね♡



ちゅっ♡

ちゅっ♡

ちゅっ♡

ちゅっ♡

ちゅっ♡

ちゅっ♡

ちゅっ♡

ちゅっ♡

ちゅっ♡

ちゅっ♡

ちゅっ♡

ちゅっ♡

ちゅっ♡

ちゅっ♡

ちゅっ♡

ちゅっ♡

ちゅっ♡

ちゅっ♡

ちゅっ♡

ちゅっ♡

ちゅっ♡

ちゅっ♡

ちゅっ♡

ちゅっ♡

俺はその淫語責めに耐えられず、姫君の温かくてやわらかいドデカおっぱいに顔を包まれながらバカみたいな量の精子を漏らした。溜め込んでいた精液が壊れた噴水のようにドビュドビュ噴射する。

俺は我が子をあやすような口で俺に甘い声をかけつつも、右手では容赦なくちんちんを高速シコシコしていた。俺はその時、自分が勇者であることを忘れていた。頭の中がおっぱいでいっぱいだった。

よしよし：♥
精子さんげくんぶ
ピユツピユツするまで
おちんちんシコシコ
してあげますからね♥

俺は大量の精子を垂らしたまま、ベッドでくたくたに横たわる。しかし姫君はまだ俺との行為に満足していないようだった。それならば残りの精子を全て献上し、召し上がっていただくまで。



勇者様あ：♥
まだせーえき出せませすよね…♥

私のからだををざーめんて
いっばいにしてください♥♥

姫君の無防備な
ドデカおっぱいが上下
いっばいに暴れている。
その光景にたまらなく
なった俺は無意識の
うちに姫君の乳首を
いじってしまった。

前後の激しいおっぱい運動により、
両乳首を指で抑えているだけで
乳首への刺激が加わっていく。
俺が気持ちよくなればなるほど
姫君の乳首も感度が高まっていき、
少しの刺激で絶頂射乳してしまう
ド変態乳首に変わっていく。



姫君のおっぱい
気持ち良すぎる!!

はー! ↓

はー! ↓

精子の大量ぶっかけて
けがれた姫君の顔と
母乳噴射絶頂でくたくたに
なったデカ乳見てるだけで、
ドクドクとバカみたい
に精子が溢れてくる。

くたあ... ↓

ビュルル ↓

ビュルル ↓

くたあ... ↓

：精子全部出しきった
のにおっぱいに対する
性欲はみなぎる一方だ。
この異常なおっぱい愛は、
おそらく本能的に
身体が母乳を求めている
証拠なのだろう。

さあ明日も魔族討伐だ。
最強のパフをかけるために、
日が暮れるまで
姫君のおっぱいを
楽しませてもらうか。

ああん
あおっぱい
あーん
あーん
あーん
あーん

~ END ~